

今回の東北関東大震災の被害が重く私たちにのし掛かってきています。

私は3月11日以来、ずっと考え続け、悩み続けています。

なぜ、このようなことが起こったのか？

神様はこの世を支配しておられ、歴史を支配しておられる。

その神様のご支配の中で、このような悲惨な出来事が起こってしまっているのです。

それは、どういうことなのであろうか、ということをお悩み、答えを求めてきましたが、分かりません。

それが、現在の私自身の正直な心境です。

震災直後に、早くも石原慎太郎都知事は、このような趣旨の発言をして批判を受けました。

「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を1回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」

その発言に対して、被災地から猛烈な反発の声が挙がりました。

この災害は、私たちに對する天罰なのか。

そのような批判を受けて、石原都知事は謝罪をしました。

私自身は、やはり石原都知事は特に二つのことで間違っていると思います。

一つは、自分は神ではないのに、そんなことが分かるのかということです。

あるいは神から聞いてはいないであろうのに、そのように語ることが許されるかということです。

神様の御心は、そんなに簡単に分かるものではありません。

神様のなさることについて、軽々に解釈してはならないと思います。

もう一つは、日本人の我欲を批判していますが、それはある意味では当たっているかも知れません。

しかし、その批判の対象に自分自身が果たして入っているのでしょうか。

自分をそこに含めないで、日本人一般を責めるのみであるとすれば、残念なことだと思います。

旧約の預言者たちは、ただひたすら、神様から聞いたことを神の民イスラエルに告げたのでした。

そして、彼らはイスラエルの民の中に自分自身も入り込んで、神からのメッセージを語ったのでした。

ですから私たちも、自らの判断によらず、神の御言葉の語るところにこそ耳を傾けたいと思います。

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。

それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。

たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても」(詩篇 46:1-3)

ここに記されていることは、まさに今回の震災に通じるような災難ではないでしょうか。

「地は変わり山々が海のまなかに移る」

「その水が立ち騒ぎ、あわだって、その水かさが増して山々が揺れ動く」

このような危機的状況の中においても、神により頼む私たちは恐れない、と告白されています。

カルヴァンは、このように語っています。

「預言者が、我らは恐れない、と言う時、彼は信仰者があらゆる不安や恐れから、あたかも彼らには何の感情もないかのごとく、全く自由であると言いたいのではない。そうではなく、単に彼らは、たとえどのようなことが起ころうとも、恐れによって打ちひしがれることがなく、かえって恐怖に打ち勝つに足る力を取り戻す、ということをお教えているのである。

このような大度量というものは、ただ一人の神を確信することのうちに基づいている。従って、神に寄り頼み、神のうちに憩いを見出す者は、ただ単に恐れることがない、と語るだけでなく、この世のあら

ゆる方角から、破滅が大音響を発して迫り来るとも、確かさと安らかさのうちに留まるであろう」

何と慰めと励ましに満ちた言葉であることでしょうか。

私たちは、木や石のようになって、恐れや悲しみを何も感じなくなってしまうわけではありません。

人間誰しも、同じように恐怖で恐れおののき、慌てふためくのです。

しかし、そこで終わらない。

神を信じてより頼むことによって、支えられ、強められるのです。

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け」と告白されている通りです。

私たちが自分の力で耐えて乗り越えるのではなく、神が私たちを助けてくださってこそ切り抜けることができるのです。

神は、このように私たちに語りかけておられます。

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」(46:10)

口語訳聖書では、このように訳されています。「静まって、わたしこそ神であることを知れ」

私が子供の頃から覚えている古い翻訳はこうです。「汝ら、静まりて我の神たるを知れ」

私たちは、様々なことであたふたとしてしまっていることはないでしょうか。

特に、今は震災のことで不安に駆られ、心を取り乱しているということはないでしょうか。

そのような私たちに神は語りかけておられます。

「汝ら、静まりて我の神たるを知れ」

私は、震災の起きた3月11日から特別な思いをもって祈り、聖書を読み続けてきました。

そして、一昨日の朝のデボーションの時に、この御言葉に出逢いました。

聖書の言葉を通して語りかけてくださるキリストの声を聞いたのです。

「兄弟愛をいつも持っていなさい。

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。

牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい」(ヘブル人への手紙 13:1-3)

今回の震災で被害を受けた方々のために私たちは何が出来るのであろうかと考えてきました。

先週の礼拝の時には、お互いの安否を問い、被害を受けた方々のために祈りました。

そして、今日は震災被災者救援のための義援金箱を教会に設けました。

お気持ちのある方は、そこに義援金を入れていただきたいと思います。

今日の礼拝後も、壮年会、婦人会、青年会に分かれますが、そこでも私たちに何が出来るかを知恵を出し合って考えていただきたいと思います。

さまざまな物資を集めて送ることもできるのではないのでしょうか。

私たちの教会のある方は、何が出来るかを自分なりに考えられたそうです。

そして、近くに今回の地震で水道が出なくなってお風呂にも入れない人々がいる。
そうだ、その人たちに自分の家のお風呂を使っていたらこうと考えて、提供されたそうです。

私は自分自身を深く見つめて思います。

何と人の痛みに鈍感で、都知事の言葉を借りれば、我欲に生きる罪深いものであろうかと。
しかし、そのような私ですが、御言葉によって問われ、扱われ、引き上げられていることを思います。
キリストは御言葉を通して私たちに語りかけておられます。

「兄弟愛をいつも持っていなさい」(13:1)

自分に兄弟愛は少ないかもしれませんが、御言葉が兄弟愛を持つように私を促しています。
ああ、そうだなあ、そのようになろう、と私自身の心が引き上げられていくのです。

「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました」(13:2)

そうか、旅人をもてなすことを忘れがちになっていたかもしれない。

もっと旅人をもてなすことのできる者になりたい。

「牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているので
すから、苦しめられている人々を思いやりなさい」(13:3)

自分は震災の中で苦しんでいる人々のことをどれだけ思いやることができているであろうか。

もっと思いやりを深め、何か出来ることを考えていきたいと思われています。

そのことが、この御言葉によっても問われているのであろうと、思われています。

もし御言葉が私をこのように教えてくれなかったら、私はもっと低いところに留まっていることでしょう。

もし御言葉が私を戒めてくれなかったならば、私はもっと我欲に走っていることでしょう。

今日まで聖書の言葉に養われて来なければ、どうなっていたであろうかと思えます。

ありのままの自分は、本当に罪深い人間だと思えます。

けれども、このような罪深い私を、キリストは十字架の贖いをもって赦し、救い出してくださいました。

そのことを感謝したいと思います。

そして、如何に生きるべきかを御言葉の光を照らして教えてくださっていることを感謝したいのです。

このようにキリストに赦され、そのキリストの恵みの中で共に生かされ、お互いに祈り合い、支え合いながら歩いていくようにと求められているのが、キリストのからだである私たち教会の姿であると信じます。